

著書紹介 影山太郎 編『属性叙述の世界』

著者	影山 太郎
雑誌名	国語研プロジェクトレビュー
巻	3
号	2
ページ	100-102
発行年	2012-10
URL	http://doi.org/10.15084/00000711

影山太郎 編

『属性叙述の世界』

2012年3月 くろしお出版

A5判 xiii+287ページ 3,800円+税

影山 太郎



「属性叙述」という専門用語は、おそらくほとんどの読者に馴染みがないことだろう。叙述というのは、述語が主語や目的語について説明を加えることであるが、これまでの文法研究のほとんどは、「誰が、何を、いつ、どこで、どうした」というように、現実世界あるいは架空世界において時間の流れとともに推移・展開する「事象」（すなわち出来事、動作、変化、一時的状態など）を叙述する文に向けられてきた。これに対して、「地球は丸い」や「あの子は聡明だ」のように、時間の流れを超越して恒久的に成り立つと想定されるモノの性質・特性が「属性」であり、そのようなモノの属性を描写することが属性叙述である。同じ「～をしている」という構文でも、「彼はいま怒った顔をしている」というのは「いま」という時間副詞が付くことから分かるように、時間の流れとともに変化する可能性のある「事象叙述」であり、他方、「彼は（*いま）太い腕をしている」は「いま」という時間の限定ができないことから分かるように、時間の流れに関わらない不変的な性質を表現する「属性叙述」である。

従来の研究では、事象叙述と属性叙述の違いは単に意味の違いであって、統語論に影響することはほとんどないと考えられがちであった。本書は、これまで看過されがちであった「モノの属性を叙述する構文」が持つ意味的・文法的な性質に光をあて、「事象を表す構文」との対比を通して今後の言語研究が向かうべきひとつの新しい方向を示すものである。

本書は、国立国語研究所において筆者がリーダーを務める基幹型共同研究「日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性」から発信される学術的成果の第一号である。既に、本誌『国語研プロジェクトレビュー』第6号で日本言語学会第142回大会（2011年6月）の公開シンポジウム「言語におけるデキゴトの世界とモノの世界」について紹介したが、本書は、シンポジウムでの発表者（影山、八亀、益岡、Horn、沈、呉人）に、新たに5人（岸本、加藤、工藤、仁田、澤田）の論文を加えたもので、これにより、理論言語学と日本語学の記述・分析だけでなく、日本語方言、外国語などを幅広くカバーする総合的な議論が提供されている。

内容的には日本語研究・言語研究の最先端の成果を示す学術書ではあるが、次のように、11篇の論文を4つのセクションに分け、この方面に馴染みのない読者でも最初から順に読んでいくと、問題点や分析の方法が次第に明らかになるように工夫されている。

I. 全体の展望

- ・影山太郎「属性叙述の文法的意義」

属性叙述という機能が単に、述語ないし文全体の意味的・語彙的性質だけによって決まるのではないことを説明した上で、属性叙述文が通常の事象叙述文とは異なる統語制約に従うことを明らかにしている。

II. 主題文と属性叙述

- ・岸本秀樹「日本語コピュラ文の意味と構造」

「XはN（名詞）だ」というコピュラ文が幾つかの種類に分類できることを示すとともに、属性を表す用法とそれ以外の用法の統語的な相違を指摘している。

- ・八亀裕美「評価を絞り込む表現形式」

「XはA（形容詞）」構文において、「山田くんは会計処理については完璧だ。」の下線部のようにAという評価・判断を下すための観点や基準を表す表現を考察している。

- ・益岡隆志「属性叙述と主題標識—日本語からのアプローチ—」

主題を表す代表的な標識「ハ」に対して「トイウノハ」、「トキタラ」という複合的形式を取り上げ、それらが属性叙述に特化した標識であることを論じている。

III. 属性叙述と時間

- ・加藤重広「日本語における属性の事象化と一時性—標準語と方言の差異に着目して—」

北日本の方言において、形容詞に「テイル」が後接して一時的な状態を表す場合を指摘し、この一時性が易失性・逸脱性・困難性などの語用論的な意味を生み出すしくみを考察している。

- ・工藤眞由美「時間的限定性という観点が提起するもの」

奥田靖雄の時間的限定性という概念がすべての文の性質を捉えるという立場から、多くの方言において時間的限定性の有無（多寡）によって「運動」、「状態」、「特性」、「質」が段階的に分布すると論じている。

- ・仁田義雄「状態めぐって」

動き・状態・属性の区別が時間的特性を核とした事態の類型であると捉え、状態が時間的限定を持つものに対して、属性は時間的限定を持たない一般化されたモノの在り方であると論じる。

IV. 属性叙述と統語構造

- ・澤田浩子「味覚・嗅覚・聴覚に関する事象と属性」

「この紅茶はさわやかな味がする」や「この楽器はおもしろい音がする」のような直接的感覚を表現する「XはNがする」構文を取り上げ、「先生は青い目をしている」構文との対比において属性表現の特徴を論じている。

- ・Stephen Wright Horn「日本語のいわゆる〈主語から目的語への繰り上げ構文〉」

「山田は田中がバカだと思っている」に対する「山田は田中をバカだと思っている」というヲ格標示構文を取り上げ、この構文では補文の述語（バカだ）がヲ格名詞句（田中を）の属性を表すことを示すとともに、この属性叙述の解釈が意味論的・語用論的要因に左右

されることを論じている。

・沈 力「中国語の付加詞主語文について」

道具や場所を表す付加詞が主語になる中国語の付加詞主語文を取り上げ、この構文が特定の時空間において発生する事象を表す通常の文ではなく、主語となる付加詞名詞句の役割属性を描写することを明らかにしている。

・呉人 恵「コリヤーク語の属性叙述専用形式—項から主題への変換のメカニズム—」

チュクチ・カムチャツカ語族に属するコリヤーク語で「質形容詞」を作り出すとされてきた接辞が、実際には形容詞だけでなく動詞、名詞、副詞にも付き、属性叙述を表すための専用の接辞であることを論じている。

属性叙述は「主題卓越型」(すなわち、主題 (X は) + 題述 (Y だ) の関係を際立たせるタイプの言語) とされる日本語に馴染みやすい特徴であり、名詞文、形容詞文、動詞文など様々な統語構造に共通して見られる。この特徴は、従来はもっぱら幾つかの形容詞に関する場面レベル述語 (たとえば available, drunk など) と個体レベル述語 (intelligent, tall など) の意味的・語用論的考察に限られていた英語などヨーロッパ言語の研究に対しても、一般言語学のレベルで寄与することができる。

しかしながら、本書の 11 名の執筆者は事象と属性の違い、あるいは属性の本質について、すべて意見が一致しているわけではない。とりわけ、「頭が痛い」のような一時的な状態と「地球は丸い」のような恒常的な属性が同じひとつの世界の中で連続するのか、それとも文法的に異なる世界に属するのかといった問題が残っている。そのあたりの意見の違いは、論文を読んで汲み取っていただきたい。

なお、本書に関連する論文として、影山太郎・沈力 (編) 『日中理論言語学の新展望 2: 意味と構文』(くろしお出版, 2012 年 4 月) に所収の影山・沈「付加詞主語構文の属性叙述機能」がある。『日中理論言語学の新展望』と題するこの論文集は、日本と中国における理論言語学研究の橋渡しを意図したもので、『日中理論言語学の新展望 1: 統語構造』(2011 年 12 月) と『日中理論言語学の新展望 3: 語彙と品詞』(2012 年 6 月) を合わせて 3 巻シリーズとなっている。

影山 太郎 (かげやま・たろう)

国立国語研究所所長。Ph. D. (言語学) (南カリフォルニア大学)。関西学院大学名誉教授。2009 年 10 月より現職。
主な著書・論文: 『文法と語形成』(ひつじ書房, 1993), 『動詞意味論』(くろしお出版, 1996), 『ケジメのない日本語』(岩波書店, 2002), 『名詞の意味と構文』(編著, 大修館書店, 2011), *Voice and grammatical relations* (共編, John Benjamins, 2006)。

受賞: 市河賞 (財団法人語学教育研究所, 1980), 第 22 回金田一京助博士記念賞 (金田一京助博士記念会, 1994)。

社会活動: 日本言語学会顧問 (前会長)・評議員, 日本語学会評議員, 日本英語学会評議員, 財団法人日本国際教育支援協会理事, 特定非営利活動法人言語資源協会理事。